

しながわ水族館のリニューアルについて

1. しながわ水族館リニューアルの方向性について（令和4年5月公表）

1) 次世代水族館の方向性

- ・長期基本計画における政策の柱を推進する役割を果たす
- ・品川の歴史や文化を発信する都市型観光拠点
- ・しながわ区民公園と一体的な魅力向上

2) イルカ展示とイルカショーの終了

- ・新たな計画ではイルカ展示とイルカショーを終了する

項目	内容
集客	首都圏唯一のイルカショーとしての独自性が失われている
財政負担	大型水槽を要するため、施設拡大化による財政負担が大きい
社会情勢	近年国際的にイルカの捕獲や飼育に批判が高まっている

3) 建設場所

しながわ区民公園内(勝島の海周辺)

4) 施設規模

中規模(延床面積約5,000㎡)

年間利用者数想定

(初年度100万人、5年後想定60万人)



5) 主な展示理念

- ・しながわ区民公園の自然と調和し、水中感あふれる展示
- ・品川の水辺の立地を活かした、歴史を感じられる展示
- ・品川らしさのある体験学習の展開
- ・品川の情報発信と区内他施設との連携
- ・区民アイデアを取り入れた展示

2. 区に寄せられた主な意見、要望

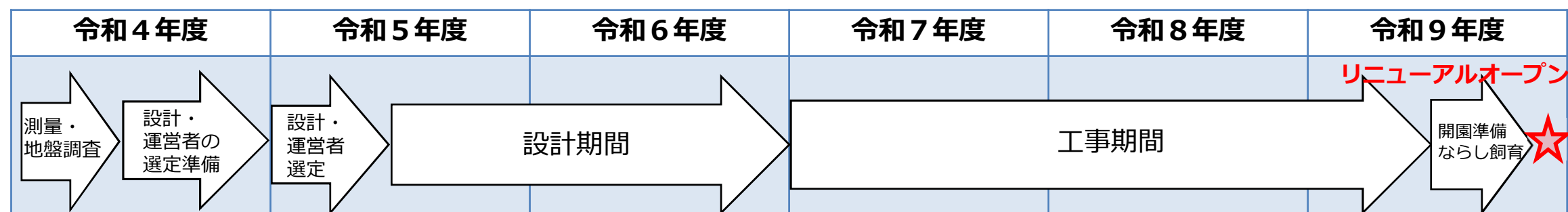
- 1) 今までのような子どもを対象にした地域密着型の路線を要望する。
- 2) イルカ展示廃止は、世界情勢に敏感で決定を誇らしく思う。
- 3) イルカ展示廃止を知りショックを受けている。
- 4) イルカ展示をやめた後、イルカはどこへ行くのか。
- 5) 飼育員の方の考えを主軸に、イルカのことを一番に考えてほしい。

- 6) 様々な媒体で広く意見を集うとともに、説明会など区民の意見を聞く場を設けてほしい。

7) リニューアル案の提案

- ・地下トンネル、道は全てゆるやかなスラローム、年間パスポートがあったほうがいい。 など

3. スケジュール



しながわ水族館リニューアルの 方向性について

令和4年3月(2022年3月)

品川区

目 次

はじめに

第1章 現在のしながわ水族館について

- | | |
|-------------------------|-------|
| 1. しながわ水族館設立の経緯 | 1 ページ |
| 2. しながわ水族館の立地 | 2 ページ |
| 3. しながわ水族館の施設概要・活動 | 4 ページ |
| 4. 利用者数の推移と実績 | 6 ページ |
| 5. しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト | 7 ページ |

第2章 しながわ水族館の課題

- | | |
|-------------------|--------|
| 1. 設備の老朽化による課題 | 8 ページ |
| 2. 展示における課題 | 10 ページ |
| 3. 利用者数の減衰と原因について | 12 ページ |

第3章 水族館の社会的背景と、区立水族館に求められる姿

- | | |
|-----------------------|--------|
| 1. 社会教育施設としての役割 | 15 ページ |
| 2. 生物展示施設としての社会的役割 | 17 ページ |
| 3. 「区立水族館として求められること」 | 17 ページ |
| 4. 次世代水族館に望まれる機能および価値 | 18 ページ |

第4章 次世代区立水族館の開発について

- | | |
|------------------------|--------|
| 1. 次世代区立水族館開発の方向性 | 19 ページ |
| 2. 次世代区立水族館の開発イメージ | 21 ページ |
| 3. しながわ区民公園および現状施設の考え方 | 23 ページ |
| 4. 今後の進め方 | 24 ページ |

参考資料

- | | |
|--------------------------------|--------|
| 1) 令和2年度「しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト」 | 25 ページ |
| 2) 検討委員会による意見の意識 | 25 ページ |

はじめに

しながわ水族館は、都市化の中で失われつつある自然とのふれあい、特に品川とゆかりの深い海と川とのふれあいをテーマとした水族館として平成3年10月に開館しました。

しながわ水族館設置の構想は昭和50年代、しながわ区民公園の当初計画で、東京湾の史料や生物を紹介する「資料館」を設置しようとしたことにさかのぼります。さらに、埋め立てなどにより水辺が失われる中、昭和60年代に入り、区民と水との接点を取り戻そうとの提案を区議会から受け、本格的に「水族館」設置の検討が始まりました。

平成3年の開館から令和3年で30周年を迎えたしながわ水族館は、この30年で主に以下のような変化や変遷がありました。

- ・施設や設備の老朽化が進行しています。
- ・近隣に複数の娯楽性の高い民間水族館が同一路線上に開館しました。
- ・娯楽要素の高いイルカショーが増えたため集客力が低下しました。
- ・水族館などの集客施設の対象者が子どもから大人に移り変わってきました。

これらの変化の中、しながわ水族館の利用者数が減少傾向にあることからリニューアルを検討することとしました。

令和2年度は「しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト」による検討の中で、専門家や区民委員からなる検討委員会および専門家会議を開催し、しながわ水族館の現状や課題について共有のもと、しながわ水族館の在り方についてご意見を頂き、報告書をまとめました。

本リニューアルの方向性については、令和2年度しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクトの報告書を受け、区としてしながわ水族館のリニューアルの今後の方向性を明確化するために策定したものです。

文化と産業の発祥地としての誇りとさらなる発展のため、区民が誇れる水族館となるように検討を深め、さらなる高みを目指して歩みを進めてまいります。

第1章 現在のしながわ水族館について

1. しながわ水族館設立の経緯

① 水族館設立の経緯

しながわ水族館は、平成3年(1991年)10月19日に開館しました。しながわ水族館設置の構想は昭和50年代、しながわ区民公園の当初プランで、東京湾の史料や生物を紹介する「資料館」を設置しようとしたことにさかのぼります。

さらに、勝島運河の埋め立てなどにより水辺が失われる中、昭和60年代に入り、区民と水との接点を取り戻そうとの提案を区議会から受け、現在のしながわ区民公園内に水族館を設置することとなりました。

品川区が古くから海や川にゆかりがあることから、「水辺とのふれあい」をテーマに水生生物を身近に観察し学ぶことを趣旨とした「遊体験」を楽しめる水族館を目指しました。

開館時の広告表現は「しながわにイルカが舞う！」で、イルカショーが見られる都内初の水族館でした。また、水族館の構想に当たっては、区民から募集したアイデアの中から入賞したプランを展示計画に反映するという方法が採られました。

しながわ水族館の変遷

昭和50年代	しながわ区民公園内の施設として「資料館」の設置を検討
昭和60年代	区議会の要望を受け、「水族館」の設置を検討
平成3年(1991年)10月19日	しながわ水族館開館
平成8年(1996年)8月	開館5周年記念「ペンギンランド」新設
平成13年(2001年)7月	開館10周年記念「シャークホール」新設
平成16年(2004年)12月	「トンネル水槽」リニューアル
平成18年(2006年)7月	開館15周年記念「アザラシ館」新設 「イルカ・アシカスタジアム」観覧席増設
平成20年(2008年)7月	「クラゲたちの世界」オープン
平成21年(2009年)7月	「東京湾に注ぐ川」リニューアル
平成29年(2017年)7月	開館25周年記念事業(※区民を対象にアイデア募集を行った) ~夢の水槽~「地球」新設 「ペンギンランド」リニューアル
令和3年(2021年)7月	開館30周年記念「カワウソ～小さな狩人～」新設

2. しながわ水族館の立地

① 水族館の立地

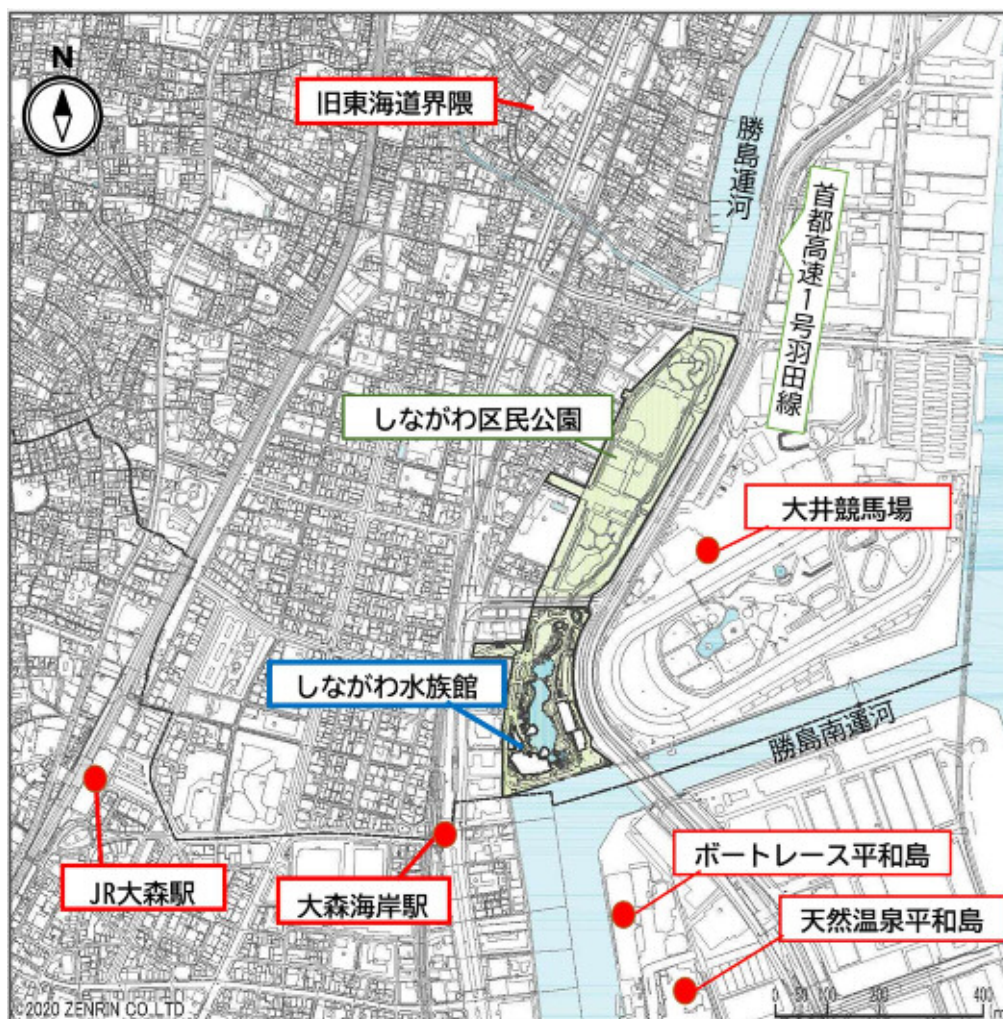
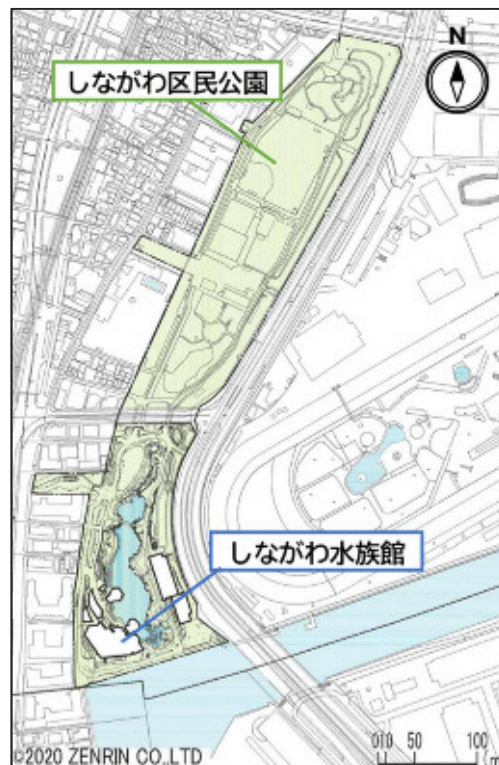
しながわ水族館は、しながわ区民公園の南側に位置し、人工湖「勝島の海」に面しています。

京急線大森海岸駅からは徒歩8分、JR線大森駅からは徒歩15分、大井町駅からは無料送迎バスで15分ほどです。

② 水族館および公園の周辺施設

しながわ水族館は区内最大の区立公園であるしながわ区民公園内に位置します。しながわ区民公園の東側には首都高速1号羽田線が走り、その奥には大井競馬場があります。

南側は勝島南運河に面し、その対岸の大田区側にはボートレース平和島、天然温泉平和島などの商業・娯楽施設があります。



③ 公園の自然環境

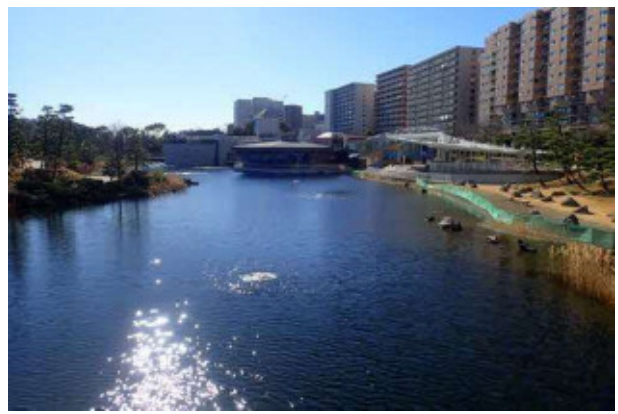
しながわ区民公園は「花とひろばと水と緑の公園」をテーマとした区を代表する公園で、勝島運河の一部を埋め立てて造成されました。

子どものアイデアを取り入れた遊戯施設に加え、本水族館、運動施設、キャンプ場、運河の海水を利用した約6,500㎡の人工湖「勝島の海」や溪流風の流れがあります。

公園内の「勝島の海」は運河から海水を引き込みクロダイやハゼなど様々な魚が見られるほか、アオサギやカワセミといった野生の水鳥も多く見られます。松並木、梅林や桜の広場があり、花見の季節には多数の花が咲きます。



【写真1】 勝島の海の北端より南(水族館方向)を展望



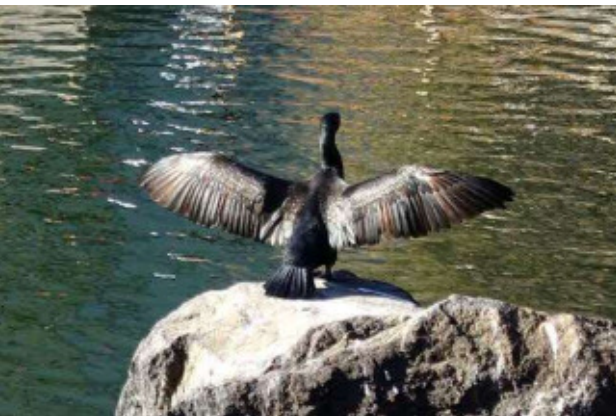
【写真2】 勝島の海の橋より水族館を展望



【写真3】 勝島の海の南端より北方向を展望



【写真4】 遊歩道横で勝島の海に注ぐ流れ



【写真5】 勝島の海周辺には野鳥が多く見られる



【写真6】 春には桜の名所になる

3. しながわ水族館の施設概要・活動

① 施設概要

【コンセプト】

しながわ水族館の展示コンセプトは「大地から大海原へ水のストーリーをたどる旅」です。川の源流から河口、大海原へと水のストーリーをたどる景観の再現により展示水槽が配置されています。

【代表的な展示】

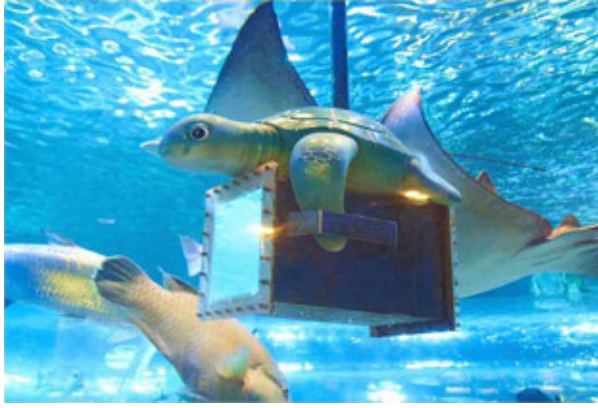
代表的な展示は、平成3年(1991年)開館当時には国内有数の長さを誇った「トンネル水槽」や、都内初として話題となった「イルカショー」です。

「トンネル水槽」や「カメラ君の海中散歩」は、当初計画時に区民公募によるアイデアをもとに実現しました。区民アイデアコンペの最優秀賞は、水槽の外から魚を眺めるのではなく、見学者自身が水槽の中に入って魚のように自由に泳ぎながら魚を眺められるハイテク水族館のアイデアで、優秀賞は、見学者が水の中を歩くというものです。前者は見学者が操作するリモコンカメラで水槽の中の様子を映す「カメラ君の海中散歩」となり、後者は「トンネル水槽」として実現しました。[写真7] [写真8]

オープン後は5年おきに、ペンギンランド(1996年)、シャークホール(2001年)、アザラシ館(2006年)を新設し、新たな展示の充実を図ってきました。現在は450種4,000点にのぼる多種多様な生物を展示しています。

構造等	鉄筋コンクリート、一部鉄骨造
建物	本館 地上1階、地下2階建 建築面積 1,919.07㎡ 延床面積 3,689.21㎡
	アザラシ館 地上2階建 建築面積 375.26㎡ 延床面積 351.88㎡
総水量	海水1,806トン/淡水40トン 合計1,846トン
飼育生物数	450種4,000点
入館料	大人1,350円、小・中学生600円、幼児300円

<しながわ水族館の施設概要> ※2021年時点



[写真 7]カメラ君の海中散歩



[写真 8]トンネル水槽

② 活動

しながわ水族館は通常の展示活動の他に、生物展示型の博物館施設として必要な役割および、公立の公益施設としての役割を果たすための様々な活動を行っています。

ア. 水族館の社会的役割とされる活動

生物展示型の博物館施設として、「種の保存活動」と「調査・研究活動」を以下の通り継続しています。

○種の保存活動

- ・絶滅が危惧されるムサシトミヨの繁殖などの保全活動
- ・イルカの繁殖と研究

○調査・研究活動

- ・東京湾での潜水による生物調査をもとにした展示
- ・大学や研究機関との共同による生物の研究活動

イ. 学校教育と連動した学習活動

- ・春休みおよび夏休み期間およびクリスマス等の期間には特別催事の開催
- ・小学生を対象にした飼育体験などの学習活動
- ・区内小学校対象に身近な水生生物への理解を促すため、しながわ水族館に無料で招待

ウ. 品川区の地域連携による活動

区立の公益施設として、他自治体との連携、交流による地域に根差した活動を、数多く実施しています。

- ・【御蔵島観光協会との連携】御蔵島の観光協会主催のイルカのパネル展の開催
- ・【福井県坂井市との連携】福井県坂井市との連携協定の締結を記念した特別イベントの実施

- ・【高知県との連携】連携協定を締結した高知県にある、新・足摺海洋館「SATOUMI」のリニューアルオープンを記念し、特設水槽で高知県近海にすむ生き物を展示

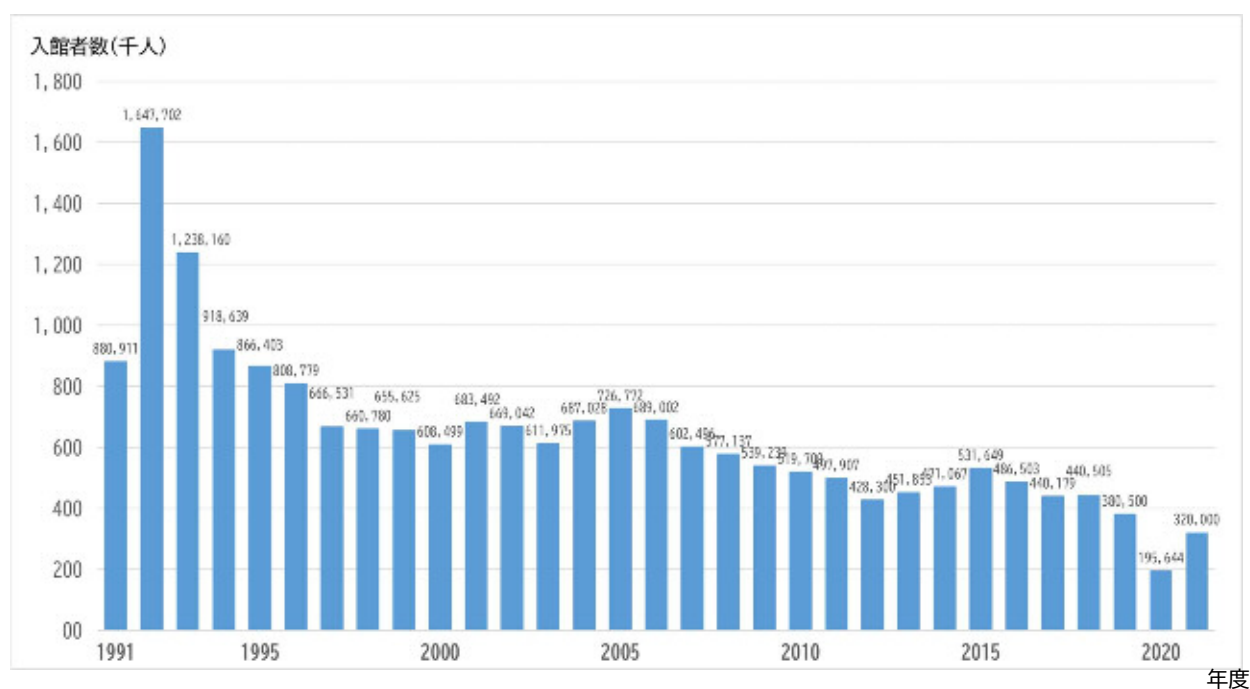
4. 利用者数の推移と実績

平成3年(1991年)の開館直後は、首都圏初のイルカショーが人気となり、最大では年間160万人を超える利用者がありました。

その直後の下落は他の新設水族館の事例と同様、開館時のプロモーション等の成功によって爆発的な集客があった時の傾向です。

2006年度以降は再び下落傾向が始まり、2019年度には40万人を割り込んでいます。(2020年度以降はコロナ禍緊急事態宣言による休館などのため参考とする)。

■しながわ水族館 開館初年度からの利用者数推移



5. しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト

令和2年度(2020年度)には、しながわ水族館の今後の指針を策定するため、「しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト」を、以下の「専門家会議」および「検討委員会」を設置して実施しました。

【専門家会議】

水族館の設立・再生および運営など水族館事業における各部門に精通した専門家による会議体です。水族館再生実績のある専門家、公立水族館館長、集客回復実績のある展示論学識経験者、イルカ展示問題の専門家、観光学インバウンド学識経験者およびバリアフリー観光専門家、水族館の利用者や広報広告専門家等により構成しました。

専門家会議では、本水族館の現況による課題認識について把握した上で、立地などの条件と利用者のニーズ資料などから検討し、現代社会における水族館のあり方、区立水族館としての役割と方向性などの議論を経て、リニューアルの可能性など今後の指針が検討されました。

【検討委員会】

しながわ水族館の設立と運営に関係が深く、本水族館周辺で地域活動をする組織や役職者による会議体です。品川区の地域づくりに関わる観光商業関連の組織、非営利活動組織の代表者、品川区の観光アドバイザーである学識経験者、しながわ水族館に直近の海洋大学の学識経験者によって構成しました。

検討委員会メンバーのそれぞれの立場から本水族館に対するご意見をいただくとともに、専門家会議での検討状況に対して議論を行いました。

また、専門家会議の議論行程の中間点と終盤において、専門家会議で議論されている内容について検討委員会に共有、ご意見をいただき報告書の最終確認を行いました。

第2章 しながわ水族館の課題

1. 設備の老朽化による課題

水族館は海水を扱う建築物であり、一般に約30年で大規模な改修を要するケースが多くを占めます。開館から30年を経た本水族館では以下の設備等の老朽化がみられています。

- ① **躯体水槽の漏水**：水槽の防水劣化により、水槽から構造躯体への漏水が生じ、構造躯体の劣化が見られます。躯体水槽の補修は困難で、特に大型水槽であるトンネル水槽周辺からの海水漏水の修理には乾燥が必須であるため、工事期間中における生物収容の施設の準備や水槽内の擬岩の解体も含めると多額の費用と、工事期間中の休館が必要です。

[写真 9-1] [写真 9-2]



[写真 9-1] トンネル水槽下漏水と躯体劣化



[写真 9-2] トンネル水槽下漏水と躯体劣化

- ② **アクリルパネルの経年劣化**：展示水槽のアクリルパネルや強化ガラスの経年劣化により、パネル接着面の変色や透明度低下、たわみや歪みが生じています。劣化したアクリルパネルは新規交換せざるを得ず、特に大型パネル交換には搬入のために外壁の解体を要するなど非常に困難かつ多額の費用が必要となります。[写真 10-1] [写真 10-2] [写真 10-3] [写真 10-4]



[写真 10-1] イルカアクリルのたわみ



[写真 10-2] イルカアクリルの表面劣化



[写真 10-3] トンネルアクリル重合部劣化



[写真 10-4] アザラシ館ガラス内部汚濁

- ③ 隠蔽部設備の劣化：天井内や床下など隠蔽部には施設設備や飼育設備の配管・ダクトが過密に混在しており、老朽化や腐食した設備の交換が必要ですが、交換には極めて困難かつ多額の費用がかかります。[写真 11]



[写真 11] 隠蔽部の配管の腐食

- ④ 屋外設備の劣化：屋外配管設備において、紫外線による樹脂配管の劣化や配管を支える金物の腐食が進んでいます。[写真 12]



[写真 12] 紫外線による劣化

- ⑤ 受水槽外壁のひび割れ：漏水によるコンクリートの劣化により、地下受水槽外壁躯体表面コンクリートの割れが進行しています。[写真 13]



[写真 13] 受水槽外壁のひび割れ

2. 展示における課題

令和2年度のしながわ水族館顧客満足度満点プロジェクトにおいては、本水族館の利用者の現状について、水族館の展示内容の視察および競合施設との比較、外部調査資料などを元に、展示における課題が抽出されました。

① 展示構成と内容に関する課題

しながわ水族館の当初計画時は、公立水族館において主流であった「子どもの教育」を意識した科学系博物館として計画され、展示方法に区民のアイデアを採用するなど、区民意見を取り入れた設計がなされました。

一方、同時期には、大人の利用者をターゲットとするリゾート指向の強い巨大水族館が次々と誕生し、巨大で美しい水槽を備えた水族館の新しい潮流が始まり、その後、この潮流が水族館の主流となりました。

その潮流の中で、本水族館は建設当時の「子どもの教育を重視した水族館」のままの展示構成と内容であり続けたため、社会ニーズから遅れるという課題を生みました。

②イルカ展示とイルカショーの課題

開館当時は首都圏唯一であったイルカショーが強い誘客力を持っていましたが、その後に規模が大きくショーアップされたイルカショーを有する2館の水族館が近隣に開業しました。

令和2年度の検討で、現状のしながわ水族館のイルカ展示施設規模では、それらの競合水族館と同レベルのショーを行うことは不可能であると認識されました。[写真 14]

また、世界的な情勢として、イルカショーおよびイルカ展示の廃止が進むとともに、現在飼育されているイルカを飼育する場合においても、プール等の施設の大型化が求められています。

しながわ水族館は平成6年にイルカの状態を良好に管理するためにメディカルプールを新設するなどし、イルカの繁殖を行ってきました。しかし繁殖はショープールで行わざるを得ないため、その間のショーは休止し、水中観覧窓も閉鎖するという状況になっています。

[写真 15]



[写真 14]古いタイプのイルカショースタジアム



[写真 15]出産時にはショーも水中観覧も中止

■コラム 利用者の年齢構成

【利用者の年齢構成が課題である理由】

近年における水族館利用者では大半を大人が占めています。近隣水族館の実績をみると、入館者の成人割合は80%を超えています。

それに対して、しながわ水族館では72.5%と低く、入館者全体に占める子どもの利用割合が高いことが言えます。

したがって、利用者数の増加には、大人が興味をもてるような展示が求められています。



グラフの解説

2015～19年度平均で、大人68.4%+シルバー4.1%=大人率72.5%は、現代の人気水族館に比べて少ない。

利用者の多い水族館は大人の利用率が80%を超えている。

3. 利用者数の減衰と原因について

① 首都圏競合水族館の存在

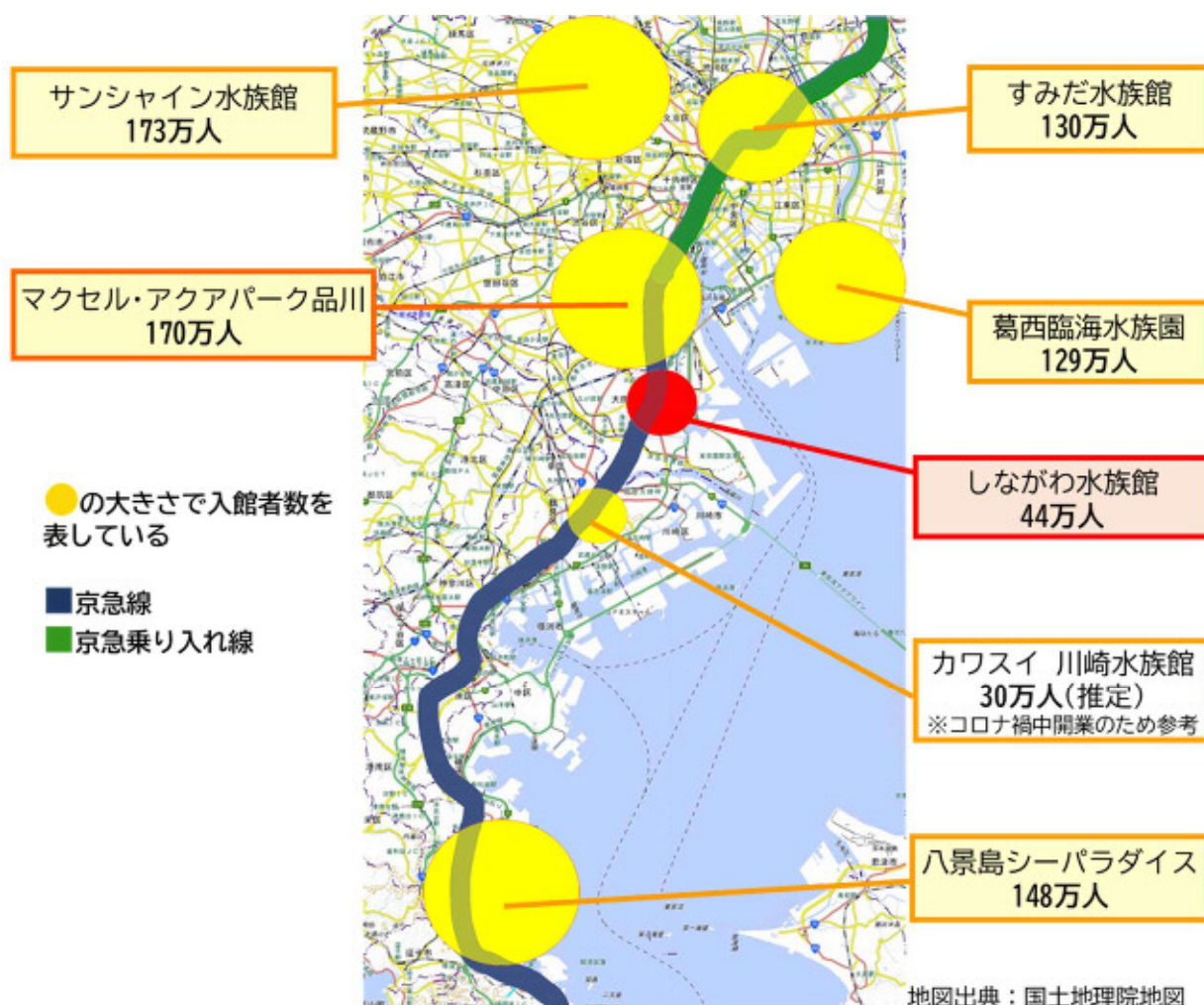
現在首都圏には7館の水族館が営業しています。そのうち京急線の乗り入れ線を含む沿線にある、すみだ水族館、マクセル・アクアパーク品川、カワスイ川崎水族館、八景島シーパラダイスは、いずれも娯楽要素の高い商業娯楽施設であり強い集客力を持っています。

また、企業水族館はいずれも大規模な改修を繰り返すことと、商業的な広報宣伝活動によって、競合を互いに上回る魅力と集客力を持ち続けています。

■首都圏の広域的な競合水族館分布

2018年度(コロナ前)の実績1万人単位で四捨五入。

※カワスイはコロナ禍中かつ実績公表をしていないため 2018年の計画発表時の想定入館者を採用した。



② 近隣競合水族館の存在

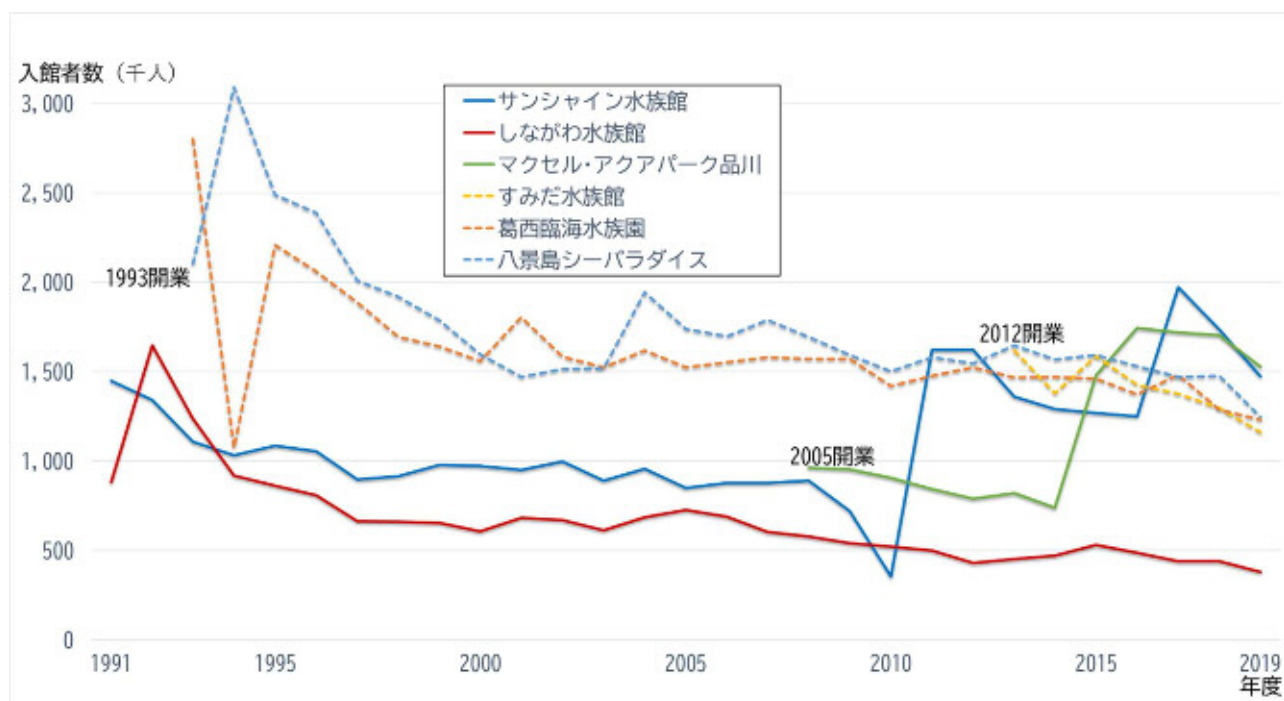
しながわ水族館の開館当時は、都内(首都圏)の水族館が少なく、都内でのイルカショーは他に無かったため最大で年間160万人の利用者がありました。しかしその直後に京急線とJR線の同一沿線上にイルカショーを誘客力とする2館の水族館が誕生しました。

- 1993年、日本最大級のイルカショースタジアムを備える八景島シーパラダイスが開業。
- 2005年、イルカショーをメインとしたエプソン品川アクアスタジアム(現マクセル・アクアパーク品川)が開業。

特に約5kmの近距離で利便性の高い品川駅前に位置するマクセル・アクアパーク品川との競合が、しながわ水族館の入館者数減少につながったと考えられます。

さらに2020年には、約10kmの距離に川崎駅前にカワスイ川崎水族館が開業しました。

■首都圏水族館の入館者比較



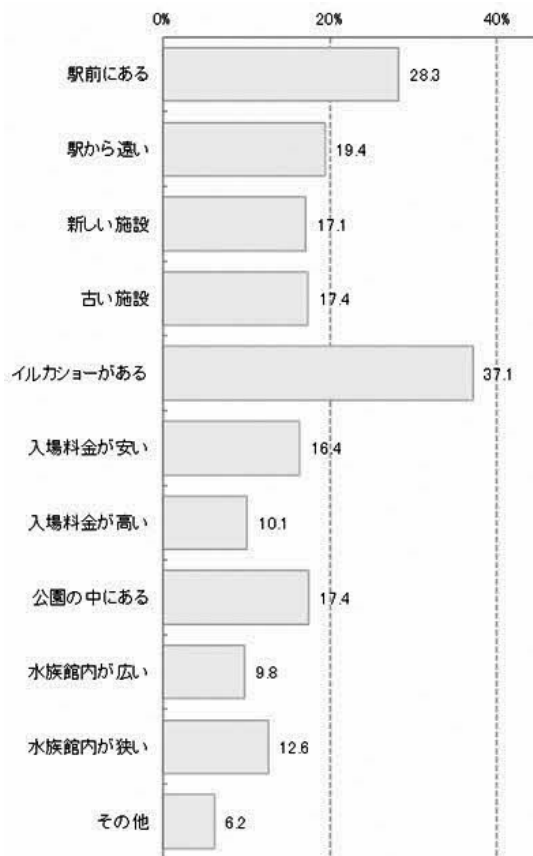
③ しながわ水族館の認知状況についての課題

令和2年度に実施した Web アンケート調査で、しながわ水族館の認知状況について調査を行いました。その結果、半数以上がしながわ水族館の場所がわからない、あるいはマクセル・アクアパーク品川をしながわ水族館と認識していることが判明しました。

(調査は、しながわ水族館商圏に絞って実施をした。)

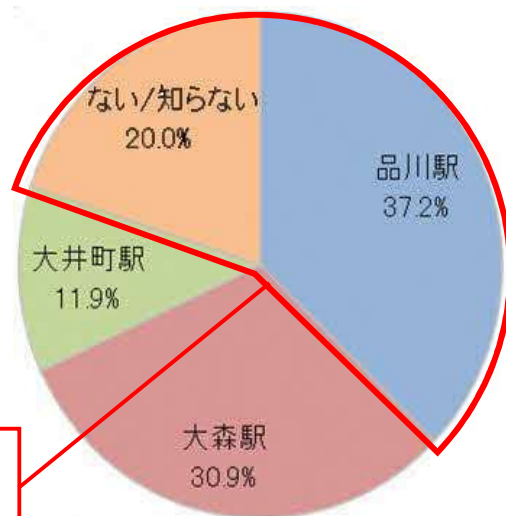
Q しながわ水族館にどのようなイメージを持っているか？(複数選択)

- 「駅前にある」「新しい施設」との回答は、マクセル・アクアパーク品川と勘違いしていると推察される。
- 「公園の中にある」「古い施設」との回答は、しながわ水族館を認識している。
- 「イルカショー」があるとイルカショーを強く感じた人の割合が最多であるが、マクセル・アクアパーク品川もイルカショーを実施しているので、共通項としてこのイメージが最多になったと推察される。



Q しながわ水族館の最寄りの JR 駅は？

- 「品川駅」との回答はマクセル・アクアパーク品川と勘違いしていると推察される。
- 「品川駅」および「あてはまるものはない/知らない」を合わせると 57.2%で、半数以上の方が認知していない。



場所を知らないか
アクアパーク品川
と勘違い=57.2%

第3章 水族館の社会的背景と、区立水族館に求められる姿

1. 社会教育施設としての役割

水族館は博物館の一種であり社会教育施設です。近年は「社会教育施設」としての社会的な役割は以前に増して求められています。

さらに社会教育施設の生涯学習機能は、全世界が取り組む SDGs(持続可能な開発目標)への関与を期待されています。

文化庁文化審議会博物館部会法制度の在り方に関するワーキンググループにおける「博物館法制度の今後の在り方について」のまとめには、『動物園、水族館、植物園、プラネタリウム等については、博物館法の制定当時から、博物館として位置づけられ、社会教育施設としての役割はもとより、レクリエーションなどの様々な役割が期待されてきたものであり、近年は、自然と人が共生できる持続可能な社会の実現という観点からも、重要な役割が期待されている。』と記載されています。

① 社会教育施設の基本的な役割

「社会教育法」第二条および第三条、また「博物館法」第一条および第二条によると、社会教育としての基本は、(1)主に青少年から成人であるということ、(2)サービスの内容は、国民の教養や趣味、レクリエーションであるということです。

これらを強く意識した近年の水族館は、展示の観覧率や時間が増え、命や地球環境について考えるきっかけを大人に与えます。近隣水族館の実績をみても、大人を増やすことで全体の利用者数も増えるため社会への影響力が強くなります。

したがって、現代の水族館は社会教育施設として、「大人の知的好奇心を刺激」し「癒やしなどによるレクリエーション」などが強く求められています。

② 文部科学省による指針

文部科学省総合教育政策局より平成30年に示された指針には、社会教育施設は、(1)「地域活性化・まちづくりの拠点としての機能への期待」および(2)「まちづくり行政、観光行政等の他の行政分野との一体的な取組の推進」が求められています。

③ 持続可能な開発目標 SDGs における役割

平成27年(2015年)に国連サミットで採択された SDGs は、2030年に至るまでの今まさに進行中の世界の開発目標であり、国民一人ひとりに教養と知識を提供する社会教育施設に期待されることは、SDGsの17の目標の様々な分野に及びます。

水族館は社会教育施設の中でも、地球環境や生物資源そのものを展示する特徴があることで、地球の市民一人ひとりの行動を促す直接的な関与が可能であるとともに、SDGs政策や活動のシンボルとなり得ます。さらに水族館の持つ情報発信力により、SDGs情報の発信源となることが期待されています。

■SDGs で水族館が関与できること

SDGsのゴール		水族館でなし得ること	
1	あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ		
2	飢餓を終わらせ食料安全保障および栄養改善を実現し、持続可能な産業を促進する	○	地球規模での展示を行い、地球生命全てのバランスを説く理念を持った水族館は、人類の世界的な食糧事情を考える起点となり得る。
3	あらゆる年齢のすべての人々の健康的な生活を確保し、福祉を推進する	○	社会人および高齢者の生涯を通じた健康維持のためのリクリエーションの役割は社会教育施設の目的の大きな一つ。
4	すべての人に包摂的かつ公正で質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する	◎	青年～高齢者の好奇心と知識欲を支える、高質な生涯学習を提供する社会教育施設であるとともに、子どもたちの学校教育を補充する施設でもある。
5	ジェンダー平等を達成し、すべての女性と女児のエンパワーメントを図る	◎	人類の歴史的な社会ではなく、生物学的なアプローチにより、性それぞれの重要性や生命誕生のプロセスを展示する水族館は、ジェンダー平等の基礎学習の場となる。
6	すべての人々の水と衛生へのアクセスと持続可能な管理を確保する	◎	水域への有害物質の放出、未処理排水などは、水環境を扱う水族館にとって重要な話題であり、さらに生物に与える影響も含めて学習および情報発信の場となる。
7	すべての人々に手ごろで信頼でき、持続可能かつ近代的なエネルギーへのアクセスを確保する		
8	すべての人々のための持続的、包摂的かつ持続可能な経済成長、生産的な完全雇用およびディーセント・ワークを推進する		
9	レジリエントなインフラを整備し、包摂的で持続可能な産業化を推進するとともに、イノベーションの拡大を図る	○	周辺環境を保つことを狙いにした水族館は、環境を持続的に利活用した観光産業や集客産業を発展させる核となり得る。
10	国内および国間の不平等を是正する	◎	生物の多様性を地球規模で展示する水族館は、常に人種や民族、性別、年齢などあらゆる事例における多様性を正しく示す指針となり、その情報発信力も強い。
11	都市と人間の居住地を包摂的、安全、レジリエントかつ持続可能にする	○	水族館の持つ教養や知識、リクリエーションの提供機能は、常に「弾力的な社会力」を生み出す原動力となり、水族館そのものがあらゆる人々を受け入れる場所でもある。
12	持続可能な消費と生産のパターンを確保する	◎	海の天然水産資源を多く利用する日本において、水産業と共に進化してきた水族館は、持続可能な消費の学びと強いメッセージを出せる社会教育施設である。
13	気候変動とその影響に立ち向かうため、緊急対策を取る	○	水生生物や水環境の展示を通じて、気候変動に関する啓発や情報発信が可能。
14	海洋と海洋資源を持続可能な開発に向けて保全し、持続可能な形で利用する	◎	水族館が最も期待される分野。身近な水辺から海洋問題に至るまで、水生生物の命を通して、全ての世代に広く、興味深く、強く問題提起と進むべき道を示すことが可能。
15	陸上生態系の保護、回復および持続可能な利用の推進、森林の持続可能な管理、砂漠化への対処、土地の劣化の阻止・回復および逆転、ならびに生物多様性の損失を阻止を図る	◎	その対象は海洋世界にとどまらず、内水面の生物や展示を通じて内陸深くやジャングル、湿地にまで広がっており、市井の人々がグローバルな地球持続を包括的に、識り、考え、学び、研究する場所として水族館ほど相応しい施設はない。
16	持続可能な開発に向けて平和で包摂的な社会を推進し、すべての人々に司法へのアクセスを提供するとともに、あらゆるレベルにおいて効果的で責任ある包摂的な制度を構築する	○	人を除く野生生物たちの平和で豊かな暮らしは、年齢を問わず平和教育へのキッカケになることが多い。
17	持続可能な開発に向けて実施手段を強化し、グローバル・パートナーシップを活性化する		

「SDGsと水族館」表出典：(株)中村元事務所「展示論」より

2. 生物展示施設としての社会的役割

① 動物園水族館の主な社会的役割

日本動物園水族館協会（英語表記：JAZA）では「4つの役割」という目標があります。

- ・ **種の保存**：地球上の野生動物を守って、次の世代に伝えていく（希少動物の保護）のために、数が少なくなり絶滅しそうな生き物たちに、生息地の外でも生きて行ける場を与える、現代の箱舟の役割を持つ。
- ・ **教育・環境教育**：生き物の説明、動物教室や野外観察会の開講などで、動物の生態を理解させ、環境教育にも結びつけ、人間がどうすればいいのかを考えるきっかけとする。
- ・ **調査・研究**：生き物たちの生態をよく知り、動物園や水族館で快適に暮らせるようするための研究を行う。
- ・ **レクリエーション**：人々に楽しい時間を提供し、楽しく過ごしながら、「命の大切さ」や「生きることの美しさ」を感じ取ってもらう。

② 水族館の主な社会的役割

海洋立国である日本の水族館には、海洋資源と海洋文化を維持することへの文化的な貢献が求められています。

- ・ **水生生物資源の持続的利用**：水生生物資源の持続的利用の立場から、文化伝統の維持、科学技術の振興および自然環境の保護保全に貢献する。
- ・ **命の展示**：食材としても身近な水生生物の生体を展示飼育することで、命や自然環境保全の大切さを紹介する。

3. 「区立水族館として求められること」

令和2年度検討の中で、地域の方々や学識経験者等による議論により、しながわ水族館に求められることは以下のとおりです。

総論

水族館は必要であり、水族館の価値として、多岐にわたる公益性を求める

水族館の新しい価値

- ・ 都内の特別な水族館として、長期に渡って人気と支持を得られる
- ・ しながわ区民公園の価値を上げる
- ・ SDGs 推進に貢献できる
- ・ 品川区民が誇りにできる、多くの都民が憩う文化度の高い社会教育施設
- ・ 「水辺環境を活かした観光の充実」のシンボルとなる情報発信力

4. 次世代水族館に望まれる機能および価値

次世代の水族館に求められるのは、最新の水族館かつ最新の社会教育施設として、その役割と効果が正しく反映された水族館です。

特に、地球環境や生物資源そのものを展示できる水族館は、SDGs のゴールのほとんどに関わり貢献でき、品川区のシンボルとしての価値を高めることが期待されます。

■区民が誇る社会教育施設：生物学的展示施設にとどまらず、区民・都民・世界を対象にした区民が誇る文化的な社会施設であることが求められています。

■公園の自然と一体化した水族館：しながわ区民公園の価値を高め、公園がより快適な空間となる、公園と一体化した水族館であることが求められています。

■都市型観光を担う品川区のシンボル：品川区長期基本計画の政策の柱「まちの魅力を活かした都市型観光の推進」の中核施設となることが期待されています。

■水とみどり豊かなまちづくりの象徴：品川区長期基本計画の政策の柱「水と親しむみどり豊かなまちづくり」の象徴となる施設であることが期待されます。

第4章 次世代区立水族館の開発について

1. 次世代区立水族館開発の方向性

令和2年度のしながわ水族館顧客満足度満点プロジェクトにおける検討により、次世代区立水族館の開発については、現代の社会教育施設の役割と価値を果たし、区民の誇りとなりシンボルとなる、真に価値ある区立水族館になることを目指すため、以下の方向性により開発することが示されました。

① 次世代水族館の方向性

令和2年度に策定された「品川区長期基本計画（2020～2029年）」では、地域づくりの分野で7つの政策の柱を立てていますが、そのうちの5つの柱「2 学びとスポーツの楽しさが広がる環境づくり」「3 伝統・文化を継承し親しむ環境づくり」「5 まちの魅力を活かした都市型観光の推進」「6 魅力的で良好な都市景観の形成」「7 水と親しむみどり豊かなまちづくり」の推進において、水族館の機能が担える分野があります。

特に「まちの魅力を活かした都市型観光の推進」では、地域の歴史や伝統による資源が点在する品川区の観光状況にあって、水族館は集客力のある観光拠点としての期待とともに、それぞれの観光資源の魅力を横断的に繋げる機能も期待できます。

また、「水と親しむみどり豊かなまちづくり」においては、区民と水との接点を取り戻すことから水面に近接するしながわ区民公園内に水族館を設置するに至った経緯による立地と環境から、区民が水辺を身近に親しみ、都民や観光客との交流の軸となる水辺空間の中核施設となることが期待されています。

そこで、次世代水族館の方向性として次の通りまとめました。

- 品川区長期基本計画において関連する政策の柱についてその推進の役割を果たすこと。
- 品川区の都市型観光の拠点となると共に、歴史文化についても情報発信する水族館となること。
- しながわ区民公園と一体となることで公園および水族館の双方の魅力を向上させること。

② イルカ展示とイルカショーの廃止

ア. イルカショーの現状

イルカショーに関しては、施設上の問題および世界的な情勢により複数の課題が抽出されたため、専門家会議と検討委員会において幅広い情報を基に議論が重ねられました。

令和2年度検討の中では、今後のイルカ展示に継続に対する公立の社会教育施設としてのあり方に加えて、今後イルカ展示を継続するには、水族館の規模設定および建設と運営管理における費用が特別に必要であると結論付けられ、イルカ展示の継続は終了することが上位提案とされました。

【令和2年度検討での主な意見】

- 今後のイルカ飼育に必要とされる水槽規模と、イルカ展示を有効にするための展示およびショーの施設を換算すると、莫大な建設費および維持管理費の負担が想定される。
- 都内初のイルカショーという独自性はすでに失われている。もし一時的に取り戻すことが出来ても、競合の民間水族館は直ぐに逆転する方法を実行できる。
- イルカショーで集客という考えが時代の潮流にあっておらず、世界的な世論から考えても、公立水族館が新たに取り組むべきことではない。

イ. イルカ展示の方向性（品川区の方針）

品川区は、令和2年度の検討を受け以下の主な要因等から総合的に判断し、新たな計画ではイルカ展示を終了するのが妥当であると結論づけました。

しながわ水族館の開館当初は首都圏唯一のイルカショーが、しながわ水族館独自の展示として人気を博したが、現在ではその独自性が失われたものとなっています。リニューアル後にもイルカショーを行うには施設の拡大化が必要です。その初期建設費や維持管理費およびリニューアル経費等で財政負担が大きいことが判明しました。

昨今のイルカを取り巻く社会情勢を踏まえても、区民に愛される水族館として運営を継続していくために、区が教育的にイルカ展示を行う役割は一区切りとし、イルカ展示は終了すると判断しました。

2. 次世代区立水族館の開発イメージ

しながわ区民公園における次世代水族館の開発については、令和2年度検討によって、立地および利用者のニーズ、現代社会における水族館のあり方、区立水族館としての役割と方向性などの議論を経て、大規模・中規模・小規模の水族館の内容をそれぞれ検討した上で、以下の開発イメージによる提案が最適かつふさわしいものとして提案されました。

① 建設場所および施設規模

- しながわ区民公園内の勝島の海に隣接する位置とします。
- 規模は中規模(延床面積 5 千㎡程度)の水族館とします。
- 年間利用者数の想定を、初年度 100 万人、5 年後想定 60 万人とします。

② 開発理念

• 大人の知的好奇心を満足させる水族館

大人を中心として、子どもから高齢者まで、幅広い世代が興味を持つ展示を展開することで誰もが知的好奇心を満足できる場を創出します。

• 区民の憩いと教養の場

しながわ区民公園の中核施設として、「文化や教養を楽しむ成人」「生涯学習を楽しむ高齢者」「子育て中のファミリー層」を主な対象者とし、区民のほとんどの世代に対応できる憩いと教養の場とします。

• SDGs を担う水辺の文化観光施設

品川区の「水とみどり豊かなやすらぎとうるおいのある都市空間づくり」の象徴的な施設とし、品川区の臨海部の観光の中核と成します。また、品川区の SDGs 推進政策の象徴として、展示および活動における情報発信力を持ちます。

• しながわ区民公園の魅力向上に貢献

しながわ区民公園の自然と調和した憩いの場として、とりわけ人工湖「勝島の海」と一体となった公園の中核的社会教育施設となり、区民公園全体の魅力を向上させます。

• 品川らしさを取り入れた展示により競争力を持つ

近隣競合水族館にはない、社会教育施設としての水族館展示を行うこととし、その展示には品川らしさを取り入れます。

【品川らしさとは】

品川は東京湾に面した海のまちであり、文化と産業の発祥地であります。まちとして古くから栄え、江戸時代から漁村として発展、海苔養殖や潮干狩りなど江戸前の海の象徴であり、東海道最初の宿場町「品川宿」がありました。古代に遡れば、縄文時代の早くから人が居住し、縄文時代の貝塚や古墳時代の古墳群など集落の遺跡が発掘されています。

品川らしさとは、これらのように品川のまちの立地や歴史文化から区民が誇れる地域の特

徴を表現したものです。

③ 展示理念

開発理念を受けて、以下の展示理念によって展示開発を行います。

- **しながわ区民公園と一体的な魅力の向上**
しながわ区民公園の景観、特に勝島の海との調和が美しい展示を計画し、都市型リゾートを感じられる展示とします。
- **水中感あふれる美しい展示**
近隣の競合水族館にはない、最新の水中感あふれる美しい展示を計画することで、自然環境の優しさを感じられる展示とします。
- **文化と歴史を取り入れた展示**
品川の文化と歴史的展示で特徴を持ち、より人文科学的な要素の展示を計画することで、品川らしさを展示に活かします。
- **東京湾にこだわりを持った展示**
東京湾とそこに注ぐ河川の展示に秀でることで、展示生物の生息地に関する情報発信を重ねられるようにします。
- **品川らしい体験学習の展開**
品川の立地や歴史を活かした体験プログラムの展開を検討します。
- **品川の情報発信と区内他施設との連携**
品川の歴史に基づいた情報を、生物展示と絡めて発信します。また、エコルとごし等の区内他施設と連携した展示を検討します。
- **区民アイデアを取り入れた展示**
区民アイデアを展示に取り入れる工夫をします。

④ 施設計画について

展示以外の施設としては、以下のことに配慮した計画を行います。

- **誰もが利用できる施設**
バリアフリーであることを基本に、ユニバーサルデザインによる誰もが水族館の機能を満足できる施設であるように計画します。
- **持続可能な施設**
建築や運営のエネルギーには、環境負荷の低い方法を検討します。また、施設の長命化のためにメンテナンス性に優れた計画を検討します。
- **近隣住民への配慮**
水族館のおよび付随する施設やイベントによる、騒音や臭気その他環境の劣化が、近隣住民への迷惑とならないための十分な配慮をもって計画をします。

3. しながわ区民公園および現状施設の考え方

① 次世代水族館立地の考え方

新たな展示理念の実現に向けては、展示効果を高める空間演出が重要であり、次世代水族館は、人工湖「勝島の海」との位置関係および公園内動線を踏まえた立地とします。

公園と連続する次世代水族館の動線計画は、誰もが利用できるように検討し、周辺環境、今後の運営形態に適した配置計画とします。

② 公園および既存施設の利用

既存施設については、水族館機能の移設や施設の状態等を調査・検討の上、公園内施設として総合的に、そのあり方について検討します。

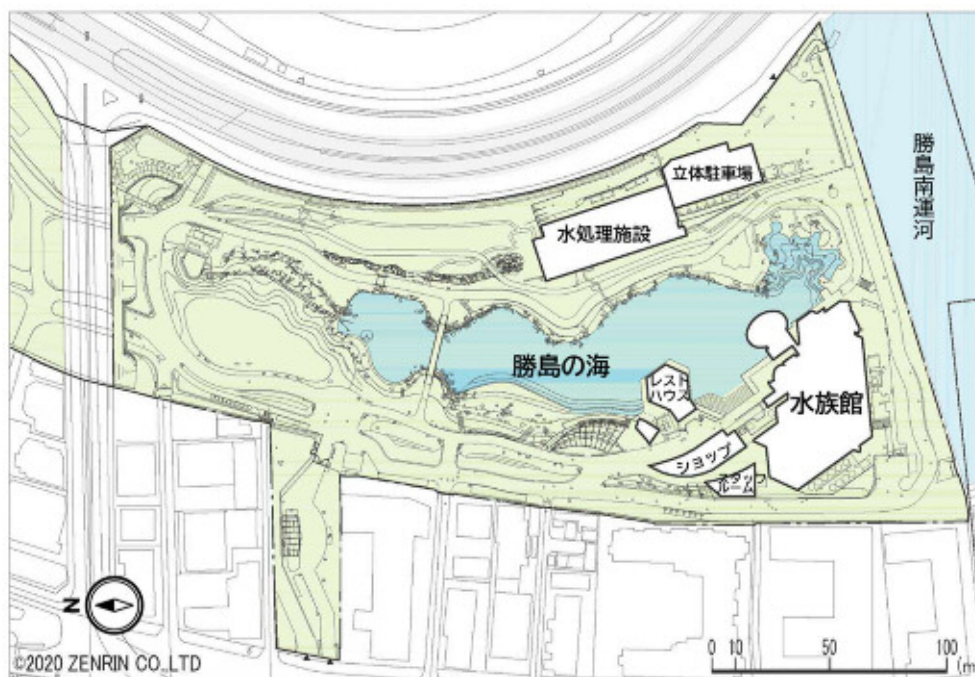
(ア) 現在のしながわ水族館

施設及び設備の老朽化が進んでおり、水槽を利用する場合には、老朽化した配管、設備等を取り換えのため、建築物の内外壁及び水槽の解体等が必要です。

別の用途にて利用する場合には、水槽の解体や水槽空間を埋める床の新設、明かり取り窓の新設なども必要であり、二次的な使用については十分な検討を要します。

(イ) 付帯施設

売店・ショップ・スタッフルーム等の建物施設については、リニューアル後も継続的に活用することを前提に検討します。



4. 今後の進め方

① 関連する組織、施設等との連携

水族館施設においては、展示水槽の展示理念、展示水槽のテーマ、水槽形状や水量が最も重要な検討項目となりますが、展示に関わる関連施設や組織などとの連携も、展示開発および運営計画に重要なものとなります。

また、しながわ区民公園の既存機能、環境、景観との連携についても、最重要項目の1つとして検討します。主に以下の項目について検討を進めます。

• 学術連携

大学などとの連携、また品川区立品川歴史館など人文系博物館や研究者との連携によって、展示内容の充実を図ります。

• 周辺施設との共同連携の強化

隣接する大井競馬場、勝島南運河対岸の大田区平和島の商業および娯楽施設、旧東海道や運河、公共交通機関など、周辺施設との共同連携を強化しながら計画を進めます。

区内の小中学校に学外体験学習の場として提供するなど周辺施設との連携を検討します。

• しながわ区民公園の自然環境、景観との調和

しながわ区民公園の四季折々で自然豊かな環境や景観を、最大限生かした施設計画を検討し、公園との相乗効果が生まれて、今後も広く区民に親しまれるよう施設計画を検討します。

• しながわ区民公園の機能向上

施設利用者と共に、公園を利用する歩行者や自転車利用者、緊急車両動線に加え、駐車場から施設までのアプローチ等、あらゆる人々が利用しやすい施設となるように、アクセシビリティとバリアフリーへ配慮した動線計画を検討します。

• 営業時間の検討

しながわ区民公園の開園時間を基軸に、近隣住民に迷惑のないよう配慮をしつつ、利用者のニーズに合わせて営業展開が出来るよう検討します。

② 予定スケジュール

- 令和4年度 リニューアルに向けた検討、事業者・設計者選定準備
- 令和5年度 事業者・設計者選定
- 令和5年度～令和7年度 設計期間
- 令和7年度～令和9年度 工事期間
- 令和9年度 リニューアルオープン

参考資料

1) 令和2年度「しながわ水族館顧客満足度満点プロジェクト」

■専門家会議のメンバー

委員名	専門分野	勤務先・公職など
(座長) 中村 元	・博物館展示論学識者 ・水族館再生専門家 ・バリアフリー観光学識者	水族館プロデューサー ・北里大学非常勤講師 ・慈慶学園 COM 名誉教育顧問 ・日本バリアフリー観光推進機構理事長
石橋 敏章	・公立水族館館長 ・イルカ展示専門家	下関市立しものせき水族館「海響館」館長 ・日本水族館協会会長
奥津 匡倫	水族館利用者代表	文筆業
小林 龍二	・公立水族館再生館長 ・水族館展示論学識者	蒲都市竹島水族館館長 ・人間環境大学客員教授 ・R. P. A 非常勤講師
穴戸 学	・観光・インバウンド学識者	日本大学教授 ・日本観光ホスピタリティ教育学会副会長 ・日本国際観光学会理事
高橋 麗	広報プロモーション専門家	共同ピーアール(株) PR アカウント本部 9 部 部長
安島 博幸	・観光学識者 ・都内観光政策有識者	品川区観光アドバイザー ・跡見学園女子大学教授 ・東京都観光事業審議会会長
高梨 智之	品川区職員	公園課長
古巻 祐介	品川区職員	文化観光課長

■検討委員会のメンバー

区分	委員名	所属・役職
学識経験者	中村 元 (委員長)	水族館プロデューサー (専門家会議座長兼任)
	安島 博幸	品川区 観光アドバイザー (専門家会議兼任)
	東海 正	東京海洋大学 教授
区民・地元関係者	有馬 紀久	大井第一町会連合会 会長
	高林 正敏	特定非営利活動法人しながわ花海道 理事長
	堀江 新三	旧東海道品川宿周辺まちづくり協議会
	嶋村 泰輝	勝島・浜川・鮫洲地区運河ルネサンス協議会
	松本 亨	一般社団法人しながわ観光協会 会長
区職員	堀越 明	企画部長
	山崎 修二	文化スポーツ振興部長
	藤田 修一	防災まちづくり部長

2) 検討委員会による意見の意訳

検討委員会においては、専門家会議によって進められている方向性および、専門家会議での意見意識に関して、概ね肯定的な意見をいただきました。

①しながわ区民公園の利用

- しながわ区民公園をより有効活用するべきである。水族館が地域活性化の核となることを期待する。
- 品川にかつてあった砂浜を意識できるよう、勝島の海の砂浜を公園利用者や水族館の展示で使えるとよい。
- 勝島の海に生物を生息させるなど、他の水族館にない展示を期待する。

②観光施設としての利用

- 地域の回遊性を意識し、地域観光の中核施設となることを期待する。
- 大井競馬場などバスの停車ができるとよい。
- 親和性の高い周辺観光施設との連携を期待する。
- 将来、都市型リゾートをイメージさせる観光地となるとよい。

③社会教育施設としての利用

- 公立水族館の立ち位置を活用し、大学との学術研究で連携を図れるとよい。
- 品川の歴史や環境など人文科学的な要素を展示するのがよい。
- 江戸前の食や漁業文化は面白いと思う。
- 大人の利用者を増やすのは賛成だが、子どものためにも水族館は必要である。
- 幼児や幼児の親、青少年にとって水族館の社会教育性は役に立つと思う。
- 水産は理科ではなく社会。その意味でも水族館は人文的博物館であるべきと思う。
- かつての東京湾を復元する活動への取り組みを期待する。

④水族館による未来の品川づくり

- 水路や水は品川の大きな財産であり水族館の意義は大きいと思う。
- 品川の海の産業や歴史を取り戻すうえで、水族館が必要だと思う。

■総論

- 公立水族館として、公園の利用促進、地域観光の活性化、地域のまちづくりに役立つ水族館であるべきである。
- 水族館と公園を社会教育施設として使うだけでなく、その地域や区全体、臨海部の文化圏を目指す中心となる水族館であるべきである。